

藤原宮大極殿院北部域出土瓦の検討

—藤原宮第20次

1 はじめに

藤原宮第20次調査は、1977年度に奈文研が大極殿院北面回廊の位置、規模、構造の把握と後殿の存否確認を目的に実施した（『藤原概報8』）。この調査で北面回廊の礎石据付痕跡を確認したほか、宮造営時に開削された運河 SD1901A、宮造営に先行する朱雀大路および四条通を発見したが、後殿の検出には至らず、存在の可能性を指摘するにとどまった。

その後、2021年度に実施した飛鳥藤原第208次調査で大極殿後方基壇 SX11650¹⁾ の存在が判明した（『紀要2022』）。基壇規模および大極殿との位置関係から、後殿基壇の可能性が高いものの、搅乱が激しく、基壇上の建物に関する情報は僅少であった。本稿では、SX11650における瓦葺建物の存否確認および大極殿院北部域の各建物の所要瓦をあきらかにすることを目的として、第20次調査出土瓦を中心に大極殿院北部域における瓦の出土状況の整理をおこなう。

2 第20次調査における瓦の概要

第20次調査出土瓦の内訳は表6の通りである。『藤原概報8』では、軒丸瓦の約7割を6273型式が占め、特に6273A型式が多いこと、軒平瓦の約8割を6641型式が占め、特に6641E型式が多いことから、6273A-6641Eが大極殿院所用瓦の一つである可能性を示した。なお、運河 SD1901A 出土資料については既に再整理をおこなっている²⁾。

第20次調査区には瓦が集中して出土した地点が複数存在する。まず、第20次調査区東南部の瓦堆積である。当該範囲での瓦の出土が多いことは調査日誌に記載があり、第208次調査ではこれと一連とみられる瓦堆積 SX11637 を検出している（『紀要2022』）。

つぎに、点在する多量の瓦を含む土坑である（以下、瓦土坑と仮称する）。土坑 SK2081・2094 がそれにあたり、第208次調査では同様の土坑を SK11641 として検出した。大極殿北方は宮廐絶後間もなく耕地化が進むが、散乱していた瓦をまとめて廃棄した土坑であろう。東面北回廊

表6 第20次調査出土瓦の内訳

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6233	B	1	6641		3	ヘラ書き丸瓦	6
	Ba	1	6641	?	1	ヘラ書き平瓦	20
6273		9	6641	Aa	4	面戸瓦	43
6273	?	2		Ab	5	熨斗瓦	112
6273	A	13		C	9	谷樋瓦	1
	B	6		E	27	隅切平瓦	10
	B?	3		E?	1	隅切丸瓦	1
	C	3		F	10	隅木蓋瓦	1
	D	4	6643		1		
6275	?	1		Aa	2		
	A	2		C	6		
	A?	1		C?	1		
6275	D	2	6646	G	1		
6279	B	3					
6281	A	3					
	Ab	2					
	B	2					
	B?	1					
	Ba	1					
			不明		2		
計		60			73		
丸瓦				平瓦			
重量				303.78kg		964.41kg	
点数				1642点		6625点	

* 運河SD1901A出土分含む

付近に細片化した瓦が大量に堆積する状況も、こうした後世の土地利用が背景とみられる³⁾。なお、SK2081南側のSK2080は宮造営期の土坑であることが新たに判明し、造営中に不良品を廃棄したものと指摘した（『紀要2022』）。

さらに、北面回廊基壇の礎石据付痕跡の下位から大量の瓦が出土している。出土地点を確認した結果、2019年度に実施した第198次調査で検出した南北溝 SD11513 の一部に相当することが判明した（『紀要2019』）。SD11513は北面回廊基壇造成後に掘削された宮造営時の排水溝であり、一部が北面回廊に重複する。この重複部では溝の底部に破損した瓦を大量に詰め、上部を版築状に埋め立てて暗渠状にする。第20次調査では、この部分を検出していったのである（以下、この北面回廊基壇との重複部を瓦詰暗渠と仮称する）。

3 第20次調査出土軒瓦

ここでは第20次調査出土瓦を型式ごとに提示し、その出土状況の整理をおこなう。なお、運河 SD1901A 出土資料については既に報告しているため、SD1901A以外で出土した資料を優先的に掲載した。瓦の産地およびグル

ープの詳細については、先行研究⁴⁾を参照されたい。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は60点5型式10種が出土している(図19・20)。

6233B型式 2点出土。1は線鋸歯文が彫り加えられる以前の6233Ba。出土位置を再検討した結果、大極殿後方基壇SX11650基壇土中から出土したものと判明した。瓦当厚1.8cm。瓦当側面は周に沿ってナデをおこなうが、一部範端が残る。クサリ礫を多く含む胎土から、高台・峰寺瓦窯産の可能性が指摘されている。

6273A型式 13点出土。うち4点が瓦詰暗渠、3点が先行条坊側溝SD1921から出土している。中心蓮子に2段の表現が見えるものが最古相とされるが⁵⁾、第20次調査出土資料には含まれない。2・3はいずれも瓦詰暗渠出土。2は凸鋸歯文縁の一部を削り取るように面取りをおこなう。同様の個体は複数出土している。瓦当厚3.9cm。瓦当側面は縦方向のヘラケズリの後、周に沿ってナデをおこなう。側面には範端の痕跡を残す。瓦当裏面は縦方向のヘラケズリをおこない、接合粘土をナデつけた際のユビオサエおよび棒状工具の痕跡を残す。丸瓦先端は未加工、瓦当側に棒状工具による丸瓦設定痕を残す。3は外縁の面取りをしないもの。瓦当厚4.2cm。調整や丸瓦の接合方法は2と同様。高台・峰寺瓦窯産。

6273B型式 9点出土。大半が床土からの出土だが、瓦詰暗渠、先行条坊側溝SD1921からも1点ずつ出土している。6273Bは瓦当部から丸瓦部の断面形状と瓦当側面の調整手法でIグループとIIグループに分けられ、I→IIの新旧関係が想定されている⁶⁾。第20次調査でグループが特定できたものは4点で、I・IIいずれも出土している。4は瓦詰暗渠出土。瓦当の大半を欠くが、Iグループと判断できる。側面には範端および枷型の合わせ目を明瞭に残す。枷型の合わせ目が丸瓦取り付き部に近い瓦当の左右に存在する。5は床土出土のIIグループ。瓦当厚4.2cm。側面は縦方向のケズリの後、周に沿うナデをおこない、一部に範端の痕跡を残す。瓦当裏面はナデで仕上げるが、丸瓦の取り付き部に対して垂直方向にユビオサエ痕跡があり、その位置で大きく瓦当が割れている。同様の裏面調整と割れ方をする個体が出土しており、枷型の合わせ目がこの位置に相当する可能性がある。クサリ礫を多く含む胎土から、高台・峰寺瓦窯産の可能性が指摘されている。

6273C型式 3点出土。先行条坊側溝SD1921および床土から出土している。蓮子に周環がみられる初期の資料は含まれない。6はSD1921から出土した完形品。瓦当に対して丸瓦がやや鈍角に差し込まれており、丸瓦先端は未加工。瓦当厚2.5cm。瓦当裏面に多量の接合粘土を用いる。瓦当を厚さ1cm程度まで薄く仕上げる個体もある。粘土紐技法。長石を多く含むマーブル状の胎土から、推定大和盆地産(Jグループ)に分類される。

6273D型式 5点出土。先行条坊側溝SD1921から1点、その他は床土からの出土である。7は床土出土。瓦当厚2.5cm。丸瓦が瓦当に対して下方に取り付くため、接合部に多量の接合粘土を用いる。長石の目立つ灰色の胎土で、丸瓦部は粘土紐技法。大和盆地内で製作された可能性が高いが、産地は不明である。

6275A型式 3点出土。運河SD1901A・先行条坊側溝SD1921から1点ずつ出土している。いずれも外縁の面取りをおこなわない第1段階。8はSD1921出土。成形時および焼成時の歪みが大きく、瓦当側面には範を装着したままハケメ調整をおこなった痕跡を残す。胎土にクサリ礫を多く含む。高台・峰寺瓦窯産。

6275D型式 2点出土。9は耕作溝出土。瓦当厚1.8cm、瓦当裏面はヘラケズリで平滑に仕上げ、接合部付近は棒状工具によるナデツケをおこなう。10は床土出土。瓦当裏面に多量の接合粘土を用い、裏面中央部がもっとも厚く、下端にむかって薄くなる(1.8~4.3cm)。瓦当裏面の調整は9と共に、丸瓦先端部両隅を切り欠き、丸瓦先端部の明確な加工が認められない点も共通する。上記の製作技法が安養寺瓦窯産6281A第2・3段階と類似することから、安養寺瓦窯産に推定されている⁷⁾。

6279B型式 3点出土。2点が運河SD1901Aから出土しており、11は床土出土とされる。側面は周に沿うナデで調整し、範端の痕跡をわずかに残す。瓦当裏面丸瓦接合部には棒状工具による接合設定痕がある。範傷進行で第1~3段階まで分類されており、3段階は淡路洲崎廃寺で用いられる⁸⁾。第20次調査で出土したものはすべて第2段階で、長石粒を大量に含むN/Pグループの胎土。N/Pグループは、胎土改変以前の高台・峰寺瓦窯産であることが指摘されている⁹⁾。

6281A型式 5点出土。運河SD1901A出土の1点以外は床土出土。いずれも文様が不鮮明となる範傷第2段階

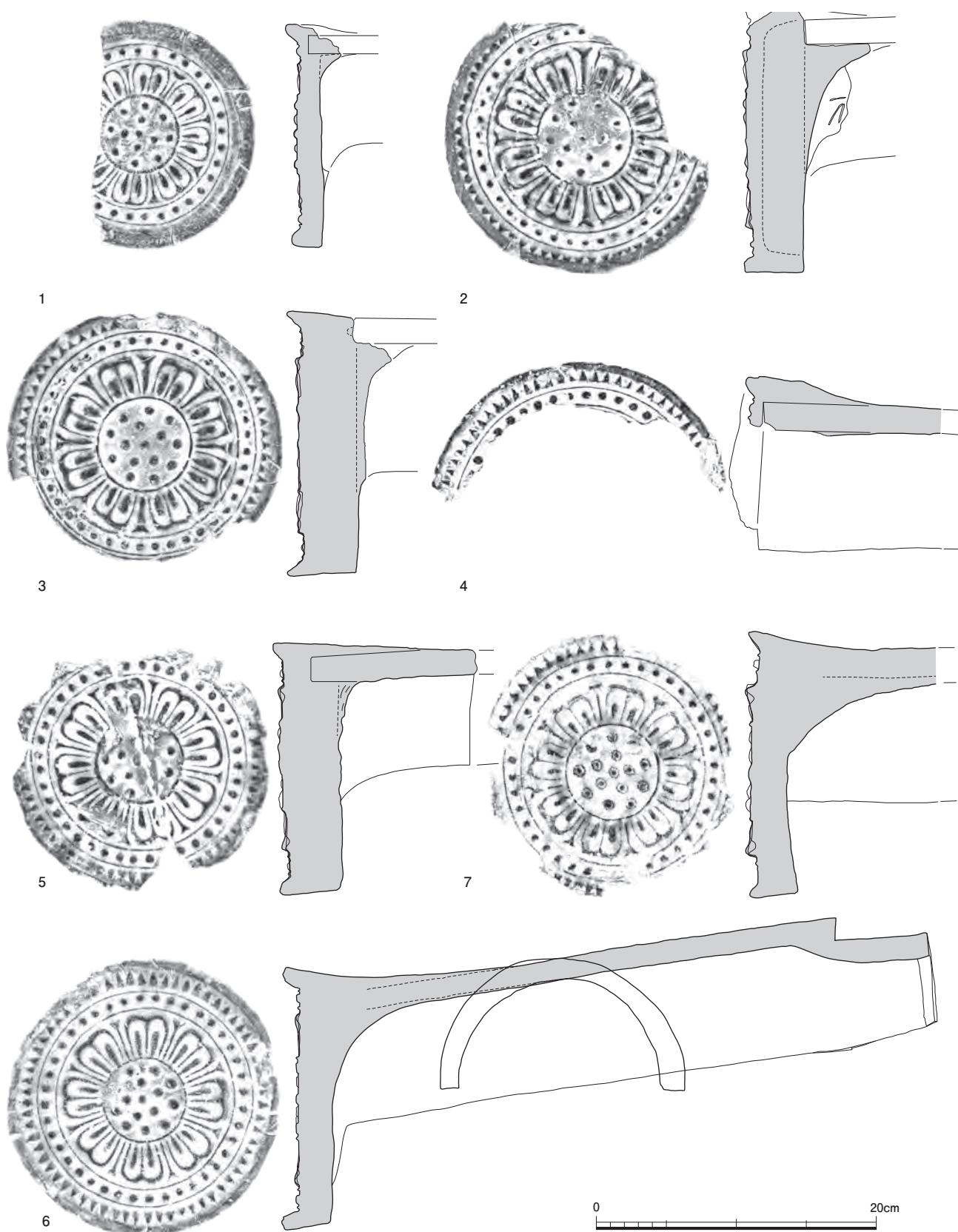


図19 第20次調査出土軒丸瓦 1:4

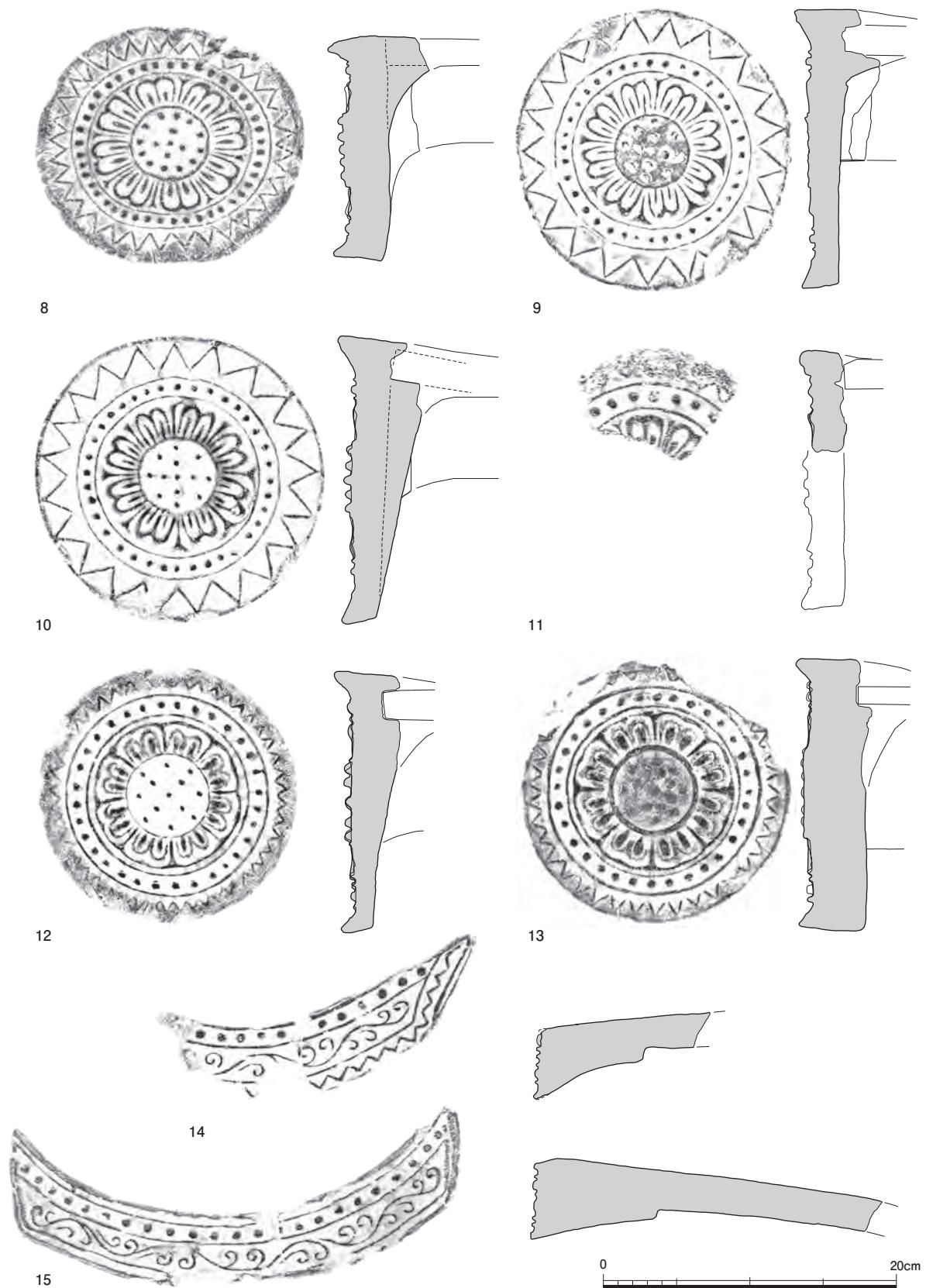


図 20 第 20 次調査出土軒丸瓦・軒平瓦 1:4

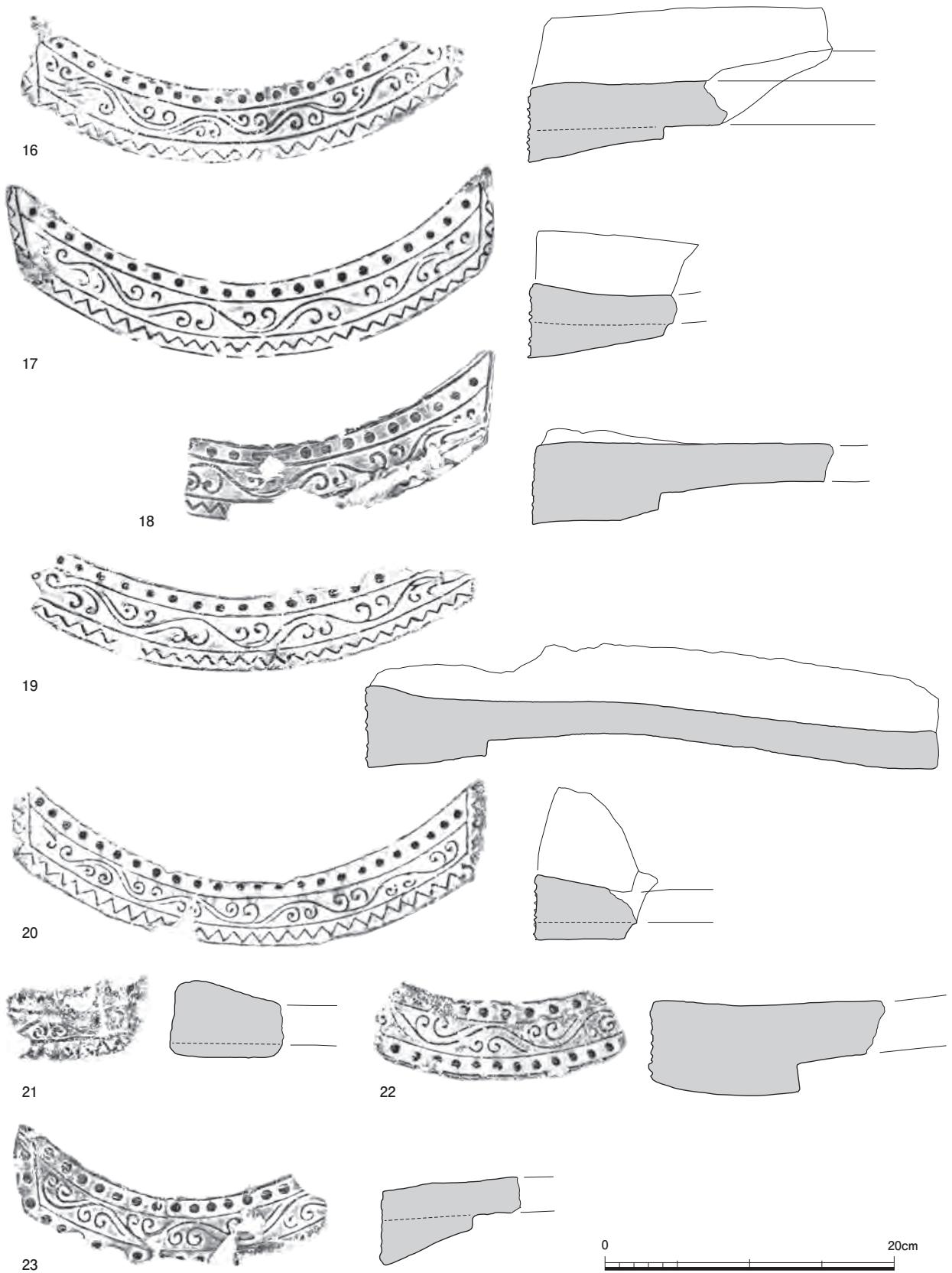


図21 第20次調査出土軒平瓦 1:4

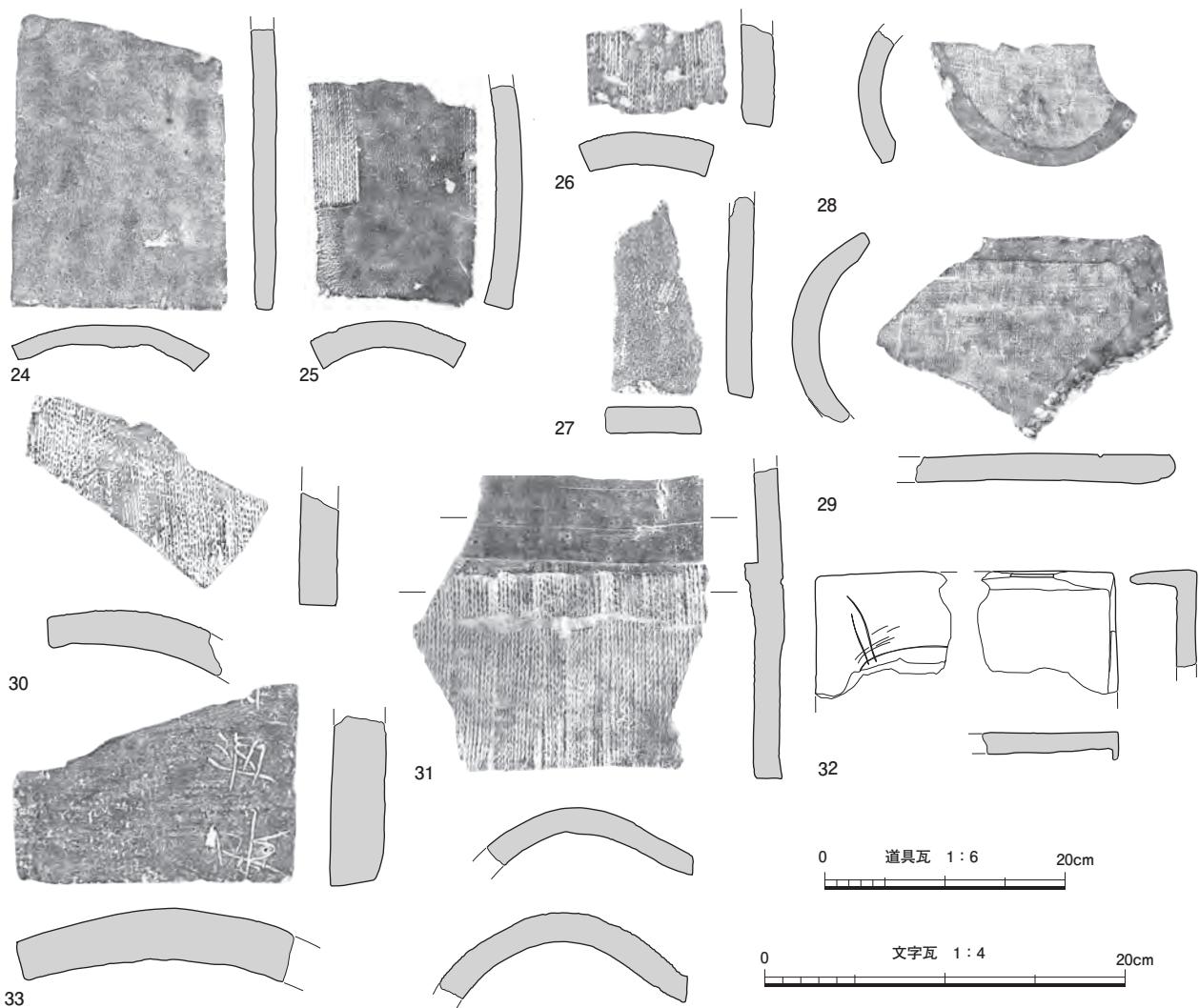


図22 第20次調査出土道具瓦 1:6 (文字瓦は1:4)

以降のもので、確実に第3段階と認められるものはない。12は床土出土。接合粘土を多量に用い、瓦当厚が1.5～3.0cmと、中央に向かって厚くなる。瓦当側面上半に縦方向のヘラケズリをほどこし、全体にナデをおこなう。範端の痕跡を一部に残す。丸瓦先端は取り付き部の隅を斜めに切り落とし、凸面に粗いキザミを施す。接合粘土剥離面にユビオサエの痕跡を残す。安養寺瓦窯産。

6281B型式 先行条坊側溝SD1921および床土から4点出土している。製作技法からIグループとIIグループに分けられ、I→IIの先後関係が指摘されている¹⁰⁾。13はSD1921出土。丸瓦先端は凸面をカットし、凹面もヘラケズリをおこなったとみられる。瓦当裏面中央部から上面にかけて接合粘土の剥離痕跡を広く残し、IIグループと

判断される。西田中・内山瓦窯産。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は73点3型式7種が出土している(図20・21)。

6641A型式 外区に鋸歯文をもつ6641Aaが4点、外区を削り取るAbが5点出土している。14は瓦土坑から出土した6641Aa。段の高さ0.8cm。頸の長さ7.5cm。6641Aaは頸部下面が強く反り返るが、頸部が直線的な個体も小数出土している。15は耕作溝出土の6641Ab。段の高さ0.5cm。頸の長さ8.6cm。胎土や製作技法は6641Aaと同様だが、黒灰色を呈する個体と赤褐色を呈する個体の両方がある。いずれも粘土紐技法、貼り付け削り出し段頸。長石を多く含むマーブル状の特徴的な胎土から、推定大和盆地(Jグループ)産に分類される。

6641C型式 10点出土。範傷進行から第1段階と第2段階が設定されているが、全体に第1段階の資料は少なく、第2段階が大半であること、脇区を斜めに切り落とさないものはすべて第2段階であることが指摘されている¹¹⁾。第20次調査出土の6641Cはすべて第2段階。16は床土出土。段の高さ0.9cm、頸の長さ9.3cm。平瓦部凸面は縦方向のヘラケズリの後、ナデで調整する。凹面は瓦当付近のみヘラケズリをおこない、広くナデで調整する。粘土紐技法。貼り付け削り出し段頸。安養寺瓦窯産。

6641E型式 24点出土。4点が瓦詰暗渠からの出土。範傷進行から第1段階と第2段階に分類され、第2段階は製作技法から2グループに細分される¹²⁾。17は瓦詰暗渠出土の範傷第1段階。段の高さ0.9cm、頸の長さ9.5cm。平瓦部凹面は瓦当付近のみヘラケズリをおこなう。18・19は範傷第2段階。18は瓦土坑出土の1グループ。段の高さ1.1cm。頸の長さ8.6cm。平瓦部凸面はナデで縦縄タタキを丁寧にナデ消すが、凹面はほぼ未調整。19は瓦堆積出土の2グループ。段の高さ1.0cm。頸の長さ8.2cm。平瓦部凸面の縦縄タタキが全面に残り、頸面にも一連の縦縄タタキが続く。凹面は1グループ同様未調整。瓦当側約4cmの範囲のみヘラケズリをおこなう。大半は第2段階だが、瓦詰暗渠から第1・2段階の両方が出土している。粘土紐技法。貼り付け削り出し段頸。高台・峰寺瓦窯産。

6641F型式 10点出土。20は大極殿後方基壇SX11650周辺で出土した。段の高さ1.4cm、頸の長さ6.1cm。平瓦部凹面はヘラケズリおよびナデで調整し、布目を残さない。6641Fには平瓦部を非常に分厚くつくり、脇区を切り落とす一群が存在し¹³⁾、床土出土の21がこれに該当する。この一群は藤原宮内でも朝堂院などでごく少数確認されている。いずれも粘土板技法。内山・西田中瓦窯産。

6643C型式 7点出土。床土や耕作溝、先行条坊側溝SD1921から出土している。頸の形態、平瓦部の厚さ、胎土でIグループとIIグループに分類される¹⁴⁾。判別できたもののうち、2点がIグループ、4点がIIグループである。22は耕作溝出土のIグループ。段の高さは1.7cm。頸の長さは10.4cm。いずれも脇区を欠く。平瓦部凸面はナデ調整、凹面は瓦当付近にヘラケズリをおこなう。長石を多量に含むN/Pグループの胎土。23はSD1921出土のIIグループ。段の高さは1cm、頸部の長さは6.4cm。I・IIで成形・調整手法は共通するが、IIグループはクサリ

礫を多く含む高台・峰寺瓦窯産の胎土を用いている。

(3) 道具瓦

熨斗瓦、面戸瓦、隅切平瓦、谷樋瓦、隅木蓋瓦が出土している(図22)。

熨斗瓦 112点出土。大半が焼成前に平瓦を分割加工した切熨斗瓦。短軸長で4種に分けられ、幅15.0～18.0cmの大型品(24)が13点、幅12.0～14.0cmの中型品(25)が43点、幅9.0～11.0cmの小型品(26)が46点、幅8.0cm以下の超小型品が6点出土している。超小型品は中型品または大型品を半裁したものと含む(27)。

面戸瓦 43点出土。40点が焼成前の丸瓦を加工した切面戸、3点が焼成後の丸瓦を打ち欠いた割面戸である。28は切面戸瓦の舌部。裏面端部に1.5～2.0cmのヘラケズリを施す。29は切面戸瓦の袖部。裏面端部に2.0～3.0cmのヘラケズリを施し、外面に幅4mmの溝を備える。

隅切瓦 12点出土。30は瓦詰暗渠から出土した隅切平瓦で、広端の左隅を切り欠く。厚さ2.5～3.0cm。胎土にクサリ礫を多く含み、高台・峰寺瓦窯産とみられる。

谷平瓦 瓦詰暗渠出土(31)。狭端に玉縁部をもつ平瓦で、肩部に粘土を貼り足して成形する。玉縁部は7.0cm以上あり、横方向のヘラケズリを施す。平瓦部は玉縁部付近に一部ヘラケズリを施すが、縦縄タタキを全面に残す。屋根の谷部に用いる谷平瓦と判断した。胎土にクサリ礫を多く含み、高台・峰寺瓦窯産とみられる。

隅木蓋瓦 大極殿後方基壇SX11650下層の整地土中から出土した(32)。外面はヘラケズリで仕上げ、端部および角に面取りをおこなう。硬質の焼成で緻密な胎土。藤原宮に用いたものとは考えにくく、宮造営以前の寺院に用いたものが整地土中に混入した可能性が高い。

(道上祥武・岩永玲)

(4) 文字瓦・ヘラ書き瓦

刻書瓦 平瓦凸面に焼成前に記された3文字のヘラ書き(図22-33)がある。□□〔海カ〕□。記載位置は瓦の右下で、右辺と下端は原形を保つ。1文字目は大部分を欠損しており、下端もしくは旁のごく一部が残存しているのみで、釈読できない。3文字目の旁は大里にもみえるが、起筆部、1画目にあたる横画は欠落している。このような字体は、中世に降る例には知られるものの¹⁵⁾、古代において大里を部首にもつ字、たとえば「部」字などの場合、異体字の「ア」の字体も含め横画を比較的し

っかりと記す事例が多いことから、速断しがたい。なお、旁が大里であるならば、「部」「郡」などの可能性があるが、偏にあたる部分も省略がいちじるしく、釈読は困難である。

(山本 崇)

ヘラ書き瓦 丸瓦で6点、平瓦で21点のヘラ書きを確認した。「十」状の記号がもっとも多く、丸瓦で3点、平瓦で8点である。このほか、「キ」状の記号が丸瓦で1点、平瓦で4点である。大半のものが凹面にヘラ書きを施す。

(5) 小括

『藤原概報8』では6273A-6641Eを大極殿院所用瓦の一つとしたが、その半数は瓦詰暗渠や先行条坊側溝SD1921からの出土で、これらを除くと、実際の出土量は6273Bとほぼ等しい。いずれにせよ、高台、峰寺瓦窯産が出土軒瓦の主体を占め、安養寺瓦窯産、西田中・内山瓦窯産の軒瓦がこれに次ぐ。これは、後述の大極殿北部全体における軒瓦の出土状況と共通する。

瓦詰暗渠から出土した軒瓦は6273A・B、6641Eのみであり、その他の丸・平瓦についてもクサリ礫を多く含む高台・峰寺瓦窯産とみられるものが主体を占める。さらに、瓦詰暗渠出土の6641Eは範傷第1・2段階の両方を含むほか、N/Pグループの丸・平瓦が一定量含まれることも注目される。6279B型式の項で触れたように、N/Pグループを胎土改変以前の高台・峰寺瓦窯産であるとする石田由紀子の見解¹⁶⁾を踏まえると、ある程度の時間幅をもつ高台・峰寺瓦窯の瓦を瓦詰暗渠にまとめて使用したと考えることも可能である。

4 大極殿院北部における丸・平・道具瓦の出土状況

図23に、丸・平・道具瓦の小地区(3×3m)ごとの出土量を示した(旧調査区埋戻土出土分を除く¹⁷⁾)。第195次調査以降は世界測地系、第20次調査は日本測地系にもとづいて、地区割を設定しているため、それぞれを分けて表示した。なお、各調査における瓦の取り上げ量には差が存在する。例えば、第200・205次調査で検出した瓦溜SX11502・11551については、藤原宮期および造営期の遺構を検出するため、土層観察畦を残して大部分を取り上げたことで、実際の出土量に近い数値が表れている。一方、第208・210次調査で検出した瓦溜SX11637・11668および瓦敷SX11669については、大部分を保存し

たため、実際の出土量よりも大幅に少ない数値となっている。こうした点に留意した上で、大極殿院北部の瓦の出土状況を概観する。

東面北回廊 宮廃絶後の瓦溜SX11502・11551を良好な状態で検出した。これらに含まれる瓦は、主として回廊東側の基壇縁付近に密集するものと、基壇上面に密集するものに分かれる。前者は比較的大きな破片で構成され、宮廃絶時に廃棄された様相を呈する。一方、後者は細片が多く、宮廃絶後に一帯が田畠へと転換する中で、わずかに残った基壇の高まりを里道として利用するため、人為的に敷かれた可能性が指摘されている(『紀要2019』)。後者のような土地利用の在り方は、北面回廊周辺では認められず、東面北回廊周辺の瓦の出土量が突出することから、北面回廊周辺で廃棄された瓦も一部寄せ集めて、この瓦溜が形成された可能性がある。

北面回廊 東面北回廊と異なり、宮廃絶後まもなく耕作地となり、基壇土の高まりが失われていたとみられる¹⁸⁾。これに加えて、回廊に重複して鴨公小学校の旧校舎が建てられた際の攪乱が激しく、瓦の出土量はごくわずかである。ただし、瓦詰暗渠からはまとまった量の瓦が出土している。前述の通り、瓦詰暗渠に含まれる瓦は高台・峰寺瓦窯産(Cグループおよび胎土改変前の高台・峰寺瓦窯産とされるN/Pグループ)の瓦を主体に構成されている。

大極殿後方東回廊・大極殿後方基壇 耕作や小学校建設等による攪乱が著しく、瓦の出土量は少ない。ただし、後方東回廊北部や大極殿後方基壇SX11650東北部・西北部では、1小地区あたりの出土量が50kgを超える宮廃絶後の瓦溜SX11552・11637・11638を検出している。SX11637の西方には大規模な攪乱があり、本来はさらに西方にも同様の瓦溜が広がっていたとみられる。SX11650西南部にある瓦溜SX11668についても、北接する近現代の水路により一部が失われた可能性がある。また、SX11650西北部では、宮廃絶後に施工された条里の坪境畦畔上に敷かれたとみられる瓦敷SX11639・11669を検出している。以上の様相から、SX11650周辺には、建物解体時に相応量の瓦が廃棄されていたと考えられ、SX11650上に瓦葺建物が存在していた可能性が大きい。

5 大極殿院北部における軒瓦の出土状況

種が判明している軒丸瓦の出土位置の分布を図24に、

軒平瓦の分布を図25に、それぞれ推定される産地別に示した（埋戻土出土分を除く）¹⁹⁾。丸・平瓦と同様、遺構の残存状況や攪乱にともなう取り上げ量の差に留意しつつ、その傾向をみていく。

産地別の傾向 軒丸瓦・軒平瓦とともに高台・峰寺瓦窯産の割合がもっとも多い。安養寺瓦窯産、西田中・内山瓦窯産、大和盆地産とされるJグループがこれに続く。高台・峰寺、安養寺、西田中・内山各瓦窯産が多い点は大極殿院南部の瓦出土状況と共通するが²⁰⁾、Jグループの割合が高い点は北部の特徴といえる。

高台・峰寺瓦窯産は6273B、6641Eがもっとも多く、いずれも大極殿院北部のほぼ全域に分布する。6273Aは東面北回廊・大極殿後方東回廊周辺で広範囲に分布するが、北面回廊周辺では瓦詰暗渠からの出土が半数を占める。これに対して、6275A、6643Cは大極殿院南門や南面回廊で多く出土するものの、大極殿院北部では運河SD1901Aや内庭部でわずかに出土する程度である。

安養寺瓦窯産は6281A、6641Cが主体をなしている。6281Aは大極殿後方東回廊から大極殿後方基壇SX11650周辺に分布のまとまりが存在し、6641Cは特に東面北回廊周辺に集中する。6275Dの出土は少ないが、大極殿院北部全域に点在する。

西田中・内山瓦窯産は6281B、6641Fが供給されている。いずれも東面北回廊から後方東回廊にかけて分布するが、6641FはさらにSX11650周辺にも分布し、東面北回廊北部で特に密集している。

推定大和盆地産（Jグループ）は6273C、6641Aが供給されている。いずれも大極殿院北部のほぼ全域に分布するが、大極殿後方東回廊からSX11650周辺にかけて、分布のまとまりが認められる。第20次調査では6641AaとAbが同数出土しているが、大極殿院北部では外区を削り取った6641Abが大半を占めている。

所用瓦および組み合わせ 大極殿院北部のほぼ全域に分布するのが6273B-6641Eである。大極殿院全域でも出土数がもっとも多い型式の一つであり、大極殿院所用瓦の主要な組み合わせとする従来の認識を追認できる。

東面北回廊周辺では上記に加え、6641Cと6641Fが密に分布する。軒丸瓦の出土量が少ないため、組み合わせの把握は困難だが、6641Fは朝堂院で6281Bと組み合い、大極殿院北部でもその分布に一部重複が認められること

から、6281B-6641Fも組み合わせの一つであった可能性が考えられる。

後方東回廊およびSX11650周辺では、6273C-6641A（Jグループ）の出土が目立ち、セット関係をもって使用されていた可能性がある。

6 おわりに

第20次調査出土瓦を中心に、大極殿院北部域における瓦の出土状況の整理をおこなった。第一の目的は大極殿後方基壇SX11650における瓦葺建物の存否に関する情報を得ることであった。後世の攪乱が激しいものの、SX11650周辺では一定量の瓦が廃棄されていたことを確認した。往時はSX11650上に瓦葺建物が存在したと考えてよい。また、大極殿院北部域では、高台・峰寺瓦窯産の軒瓦の出土が多く、安養寺瓦窯産・西田中・内山瓦窯産の軒瓦がこれに次ぐという大極殿院全体で共通する傾向に加え、Jグループ（推定大和盆地産）の軒瓦が比較的多く出土していた。これは大極殿院の中でも北部の特徴といえ、大極殿院南部で出土する6275A・6643Cが北部ではほとんど出土しないことを含め、北部と南部の違いを抽出することができた。こうした差異が大極殿院の造営段階の差を反映している可能性も考えられるが、さらに整理を進め、その実態をあきらかにしていきたい。

（道上・岩永）

註

- 1) 本稿は後殿の存否に関する情報を得ることを目的としているため、本書の飛鳥藤原第210次調査報告にある大極殿後方基壇SX11650という遺構名で統一し、後殿SB11650は使用しない。
- 2) 石田由紀子「藤原宮運河SD1901A出土の瓦－第20次調査から」『紀要2012』。
- 3) 道上祥武「『藤原宮』後」『文化財論叢V』2023。
- 4) 石田由紀子「藤原宮の瓦」『古代瓦研究V』奈文研、2010。清野孝之『蛍光X線分析と鉱物組成分析による飛鳥藤原地域出土古代瓦の生産・供給体制の研究』2020。
- 5) 前掲註3清野論文。
- 6) 前掲註3石田論文。
- 7) 花谷浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』40-2、1993。
- 8) 前掲註3清野論文。
- 9) 石田由紀子「藤原宮における瓦生産とその年代」『文化財論叢IV』2013。
- 10) 前掲註3石田論文。
- 11) 前掲註3清野論文。
- 12) 前掲註4石田論文。

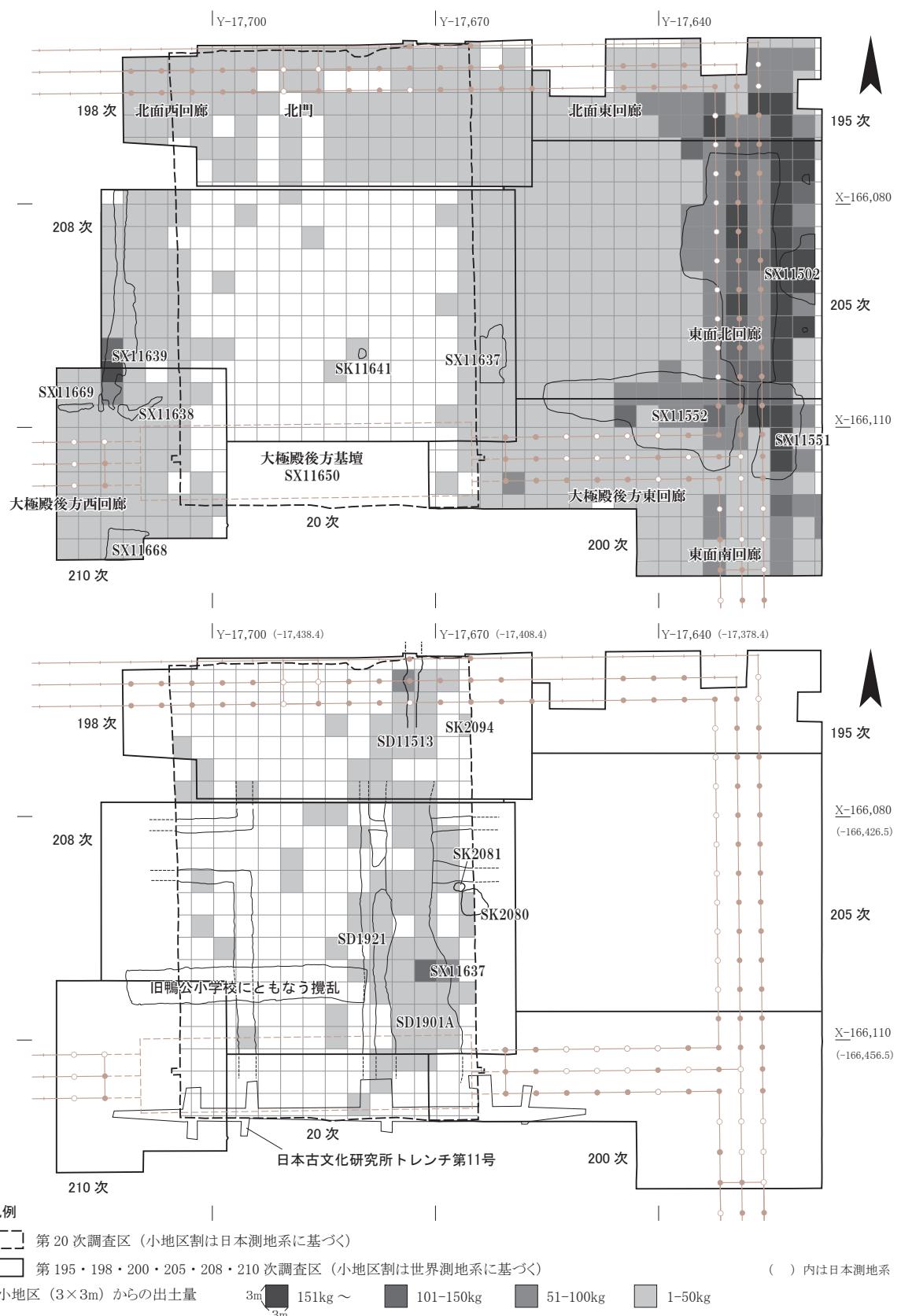
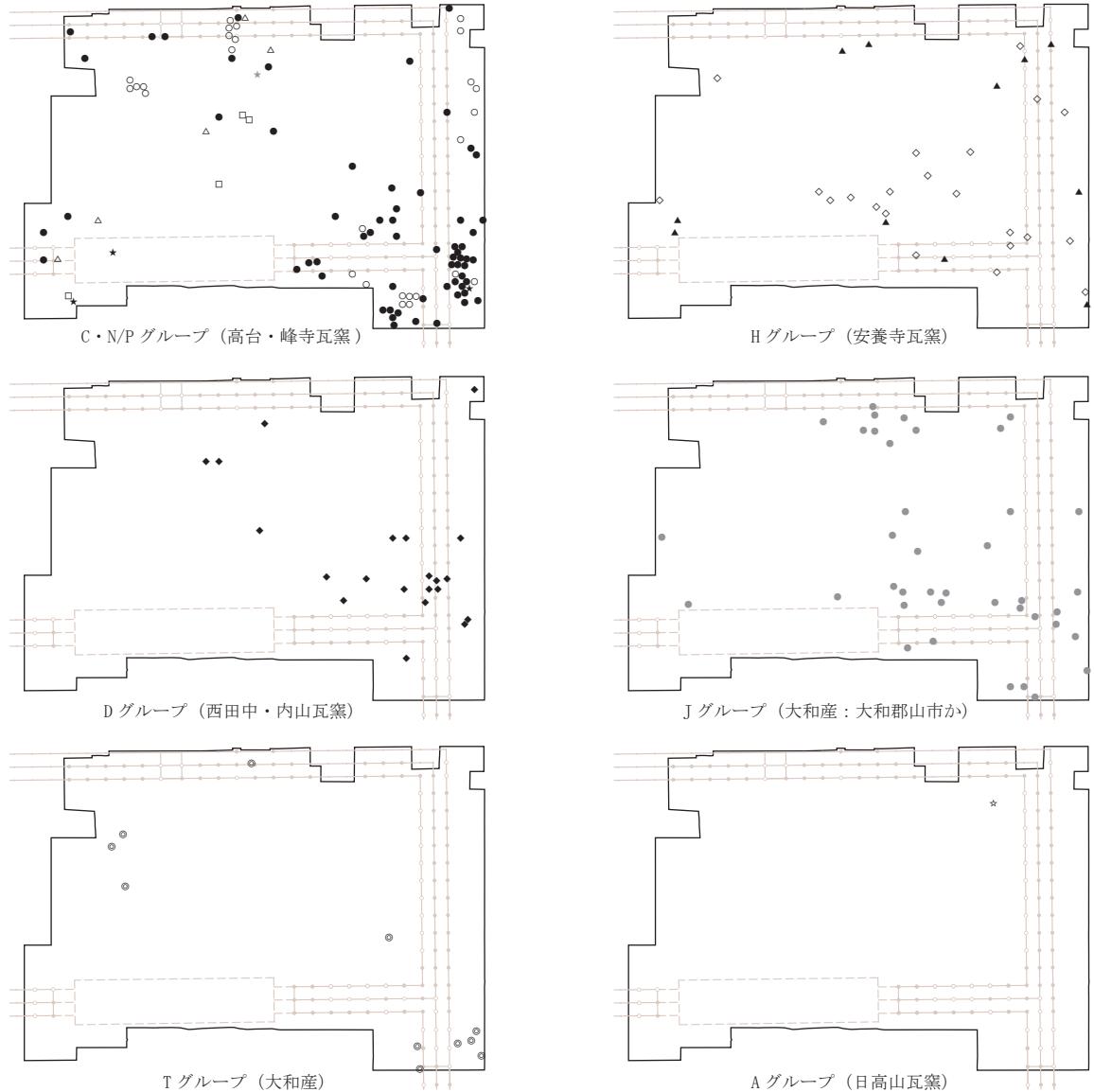


図23 大極殿院北部における丸瓦・平瓦・道具瓦の出土状況

(上：第195・198・200・205・208・210次調査 下：第20次調査)



凡例 (ドット1つが1点を表す)

☆ 6233A	★ 6233Ba	★ 6233B	□ 6279B	○ 6273A	● 6273B	● 6273C	◎ 6273D
△ 6275A	▲ 6275D	◇ 6281A	◆ 6281B				

図 24 大極殿院北部における軒丸瓦の出土状況

- 13) 前掲註4石田論文。
- 14) 前掲註4石田論文。
- 15) 例えば、小早川隆景書状（波多野幸広監修・東京手紙の会編『くずし字辞典』思文閣出版、2000、1119頁に採録）。
- 16) 前掲註3石田論文。
- 17) 第20次調査で出土した瓦のうち573.94kgについては、帰属する小地区が不明のため図に反映できていない。これは、図5の範囲から出土した丸・平・道具瓦の総量(19446.13kg)の3%に当たる。

- 18) 前掲註2。
- 19) 丸・平瓦等と異なり、軒瓦はいずれの調査においても基本的に全て取り上げているが、第20次調査出土の11点(6273A 2点、6641C 3点、6641E 3点、6641F 2点、6643C 1点)については、帰属する小地区が不明のため図に反映できていない。これは図6・7の範囲から出土した軒瓦の総数(973点)の1%、種が判明した軒瓦の総数(718点)の1.5%に当たる。
- 20) 前掲註3石田論文。

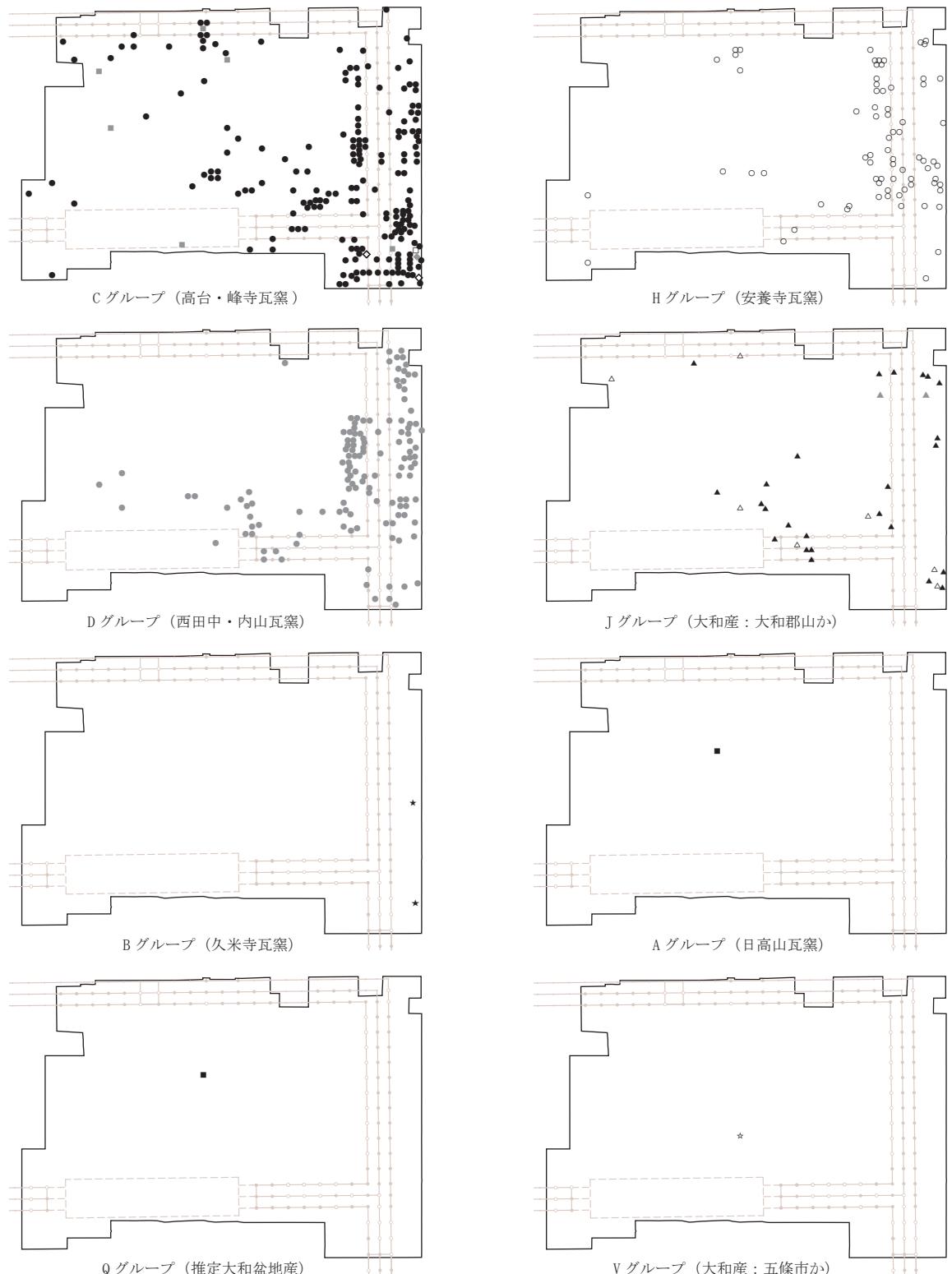


図 25 大極殿院北部における軒平瓦の出土状況